

『前向きに輝ける自分であるために』

日野高等学校 3年 藤澤 大和

私は、チャレンジ精神がとても重要であると考える。その思いを本気で実感したきっかけが、3年生のときに務めた体育祭の団長としての経験だった。縦割りの3つのクラスをまとめる団長に立候補したとき、気持ちは最初から前向きだった。体育祭の度に「自分もあの場所に立ちたい」と思っていたからだ。でも、心の奥には不安や恐れもあった。「果たして自分に団長が務まるのだろうか」「うまくいかなかったらどうしよう」。そんな気持ちを押し殺して一步踏み出した。あの瞬間が、自分の中での最初の“挑戦”であった。団長になってみると、想像以上に壁が高すぎる、そう感じることが多くありました。特にダンス練習では、まとまりが悪く全体のモチベーションも下がり、みんなの反応が薄い日もあった。そんな時、「やっぱり自分には無理なんじゃないか」と弱気になったこともある。けれど、逃げたくなった自分に対して、「いや、ここでやめたら意味が無い」と言い聞かせた。自分がいちばんに声を出し、誰よりも楽しそうに動くことで、まずは雰囲気を変えようと決めた。

その日から、私は毎日のようにみんなと向き合った。練習後に残って意見を聞き、一人ひとりが抱えている思いを知ろうとした。時には「団長いつも楽しそうやな」と後輩が言ってくれることもあった。そういう言葉が嬉しかった。少しずつみんなの距離が縮まり、笑い声が増えていった。気づけば、私がみんなを引っ張っているというより、みんなが私を支えてくれていた。黄団のテーマは「みんなの夢や希望を込めて、みんなが輝く」。どんな立場の人でも、一緒に体育祭というステージで輝けるようにという思いを込めて練習を続けた。ダンスの完成度が上がっていきにつれ、みんなの表情がどんどん明るくなっていった。リハーサルの日には、他の団の団長から「黄団、めっちゃ楽しそうやな！」「団結力や笑顔やりますねえ！」などと声をかけられた。その言葉が何より励みになった。

そして迎えた本番当日。真夏の太陽の下、円陣を組んだとき、自然と涙がこみ上げた。緊張よりも、「このメンバーでここまで来られた」という誇りの方が大きかった。なにより、自分がみんなをまとめてきた、団の中心なんだと考えるほど震え上がった。最高にハイってやつだ。自分の合囃で音楽が流れた瞬間、自分は今誰よりも主役だ、誰よりも目立つんだと堂々と全力で始めた。踊っている最中も数多の歓声が黄団を包んでいた。みんなで息を合わせて踊りきり、最後の決めポーズを取ったとき、会場からとてつもなく大きな歓声が上がった。結果は、全4団の中で黄団ダンス最優秀賞。自分の団が賞をとれる、全員が喜ぶということがこんなにも素晴らしいことなのかと身に染みて思った。努力が形になったという喜びと、挑戦してきた時間のすべてが報われたような感覚だった。思えば、最初の一歩を踏み出すときがいちばん怖かった。でも、あの時勇気を出して立候補していなかったら、こんな経験は絶対にできなかっただと思う。

挑戦は、結果よりもその過程に意味がある。大切なのは真実に向かおうとする意思であり、失敗を恐れて何もしないことこそ、一番もったいない。体育祭を通してそれを心の底から学ん

だ。この経験を経て、私は「できるかどうか」ではなく、「やりたいかどうか」で動けるようになった。これから的人生でも、新しい環境や困難に直面することがあると思う。けれど、そのたびにあの夏の自分を思い出して、「チャレンジを やらへんなんて もったいない」と胸を張って言いたい。あの日のように、どんなときも前向きに輝ける自分でいたい。